

ジェンダーロールの呪縛と越境

竹山 友子

はじめに

本シンポジウムのテーマは「ジェンダーロールの呪縛と越境」である。元々ジェンダー批評は男女間格差の問題を俎上に載せるフェミニズム批評から発展したため女性に焦点を当てることが多いが、現在ではジェンダー問題は男女間だけでなく、LGBTQ といった性的マイノリティの問題も含むようになった。また、近年ではSNSの普及も相まって様々な場における性差別、セクシュアルハラスメント、性別分業の実態など、当事者が声を上げる機会が増えて、ジェンダー意識は一般社会に浸透してきている。文学批評においても、ジェンダーという言葉が示す通り、必ずしも女性作家や女性表象を扱うわけではなく、男性表象はもちろんトランスジェンダー表象などいずれも含み、さらに作家の性別も問わない。本シンポジウムでは文学作品が一般市民の手に届き始めるようになった初期近代以降のテキストに表出される規範的ジェンダーロールに焦点を当て、作者も含めて性別にかかわらずジェンダーロールに縛られる姿、あるいはそれと格闘し、越境しようとする姿を分析した。

議論の内容

最初に司会の竹山が「規範的ジェンダーロールの礎」と題したイントロダクションにおいて、シンポジウムテーマの前提となる規範的ジェンダーロールが築き上げられた背景を解説した。特に、原罪と楽園の喪失に基づくキリスト教の女性観が初期近代以降の英国における規範的ジェンダーロールの礎となり、それらに女性だけでなく男性あるいは夫婦ともども縛られ、その呪縛が後々まで続くことを示した。しかしその一方で、女性論争やパンフレット論争による女性擁護的な執筆活動が台頭するのもこの初期近代であり、時代が進むにつれて緩やかではあるものの着実にジェンダーロールの呪縛を解こうとする試みが広がっていったさまを、各時代の特に女性作家の文献を紐解いて提示した。

その後、概ね時代順に講師による発表に移った。まず、前原澄子氏が「ジェンダーロールの曖昧性——『西国の美しい娘』(第1部)のベスを中心に」の題目で、エリザベス朝演劇の商才に富んだ戦う女性主人公の姿を、同時代の工業化以前の女性による商業活動やバラッドで歌われる実在した女性兵士像と結びつけて論じた。次に齊藤美和氏が「『すっぴん』崇拝と初期近代の化粧談義」と題して、17世紀を中心に繰り広げられた化粧をめぐる言説について、シェイクスピアやマーガレット・キャヴェンディッシュなど男女双方の作家の作品をもとに、art と nature のせめぎ合いなどを軸に詩作と化粧を結びつけながら考察した。続く竹山の「同性への愛と罪の意識——友愛とホモエロティシズムの狭間——」では、16世紀末の男性詩人リチャード・バーンフィールドと王政復古期の女性作家アフラ・ベーンの詩作品に見られるホモエロティシズムの問題を、古代ローマ／エリザベス朝／王政復古期における同性愛に対する社会の対応を踏まえたいうで比較検討した。4人目の講師からは時代を近現代に文体を小説へと移した。西垣佐理氏は「ヴィクトリアン・マスキュリニティの確立と男性による看護——『嵐が丘』を中心に——」の題目で、男性による看護の問題を『嵐が丘』を中心に『大いなる遺産』における描写とも比較しながら、ヴィクトリア朝における男性性の確立および夫の義務という観点から論じた。最後にアメリカに舞台を移し、中川千帆氏が「女性の居場所と職業——看護師探偵 Hilda Adams と Sarah Keate——」と題して、20世紀前半から半ばの女性作家による犯罪小説に登場する看護師探偵像を分析し、彼女たちの「女性らしさ」の裏に潜む特殊な私的役割と、さらには戦争や国家運営へと結びつく公的役割を考察した。

議論を終えて

今回の議論から見えてきたことは、作品中のジェンダーロールを越境する人物も現実の人々の姿と重なる部分が多々あり、背景となる時代を反映しながら徐々に変化している点である。エリザベス朝演劇に登場する現実離れた戦う女性像にも、実在する人物の要素が多く取り入れられている。フェミニニティの象徴ともいえる私的な化粧が、女性の役割とは無縁と思われた国家的役割として語られたのは、劇でも詩でもなく、作家の考えが直接示される随筆においてである。また、ジェンダーロールに縛られるのは男性も同じで、むしろ同性愛においては女性のほうが国家の法的に自由な立場で、ジェンダーロールを越境できる可能性が高かったといえる。看護をキーワードにすると、看護がヴィクトリア朝の家庭を維持する夫の義務や男性性にもつながるこ

と、さらには看護師探偵像が示すように個人の健康回復だけでなく家庭の機能回復にもつながり、戦争を背景に国家的な意義を持つようになったことが作品考察から提示された。ジェンダーという大きな枠組みの中で、劇、随筆、詩、小説といった様々な文体で書かれた男女双方の作家の作品を扱うという少々欲張りなシンポジウムとなったが、そのことがむしろジェンダー批評の範囲の広さやさらなる可能性を示していると言えるだろう。